

北九州市立大学  
文学部紀要

第94号

カフカのスペイン  
——ここではない、どこかへの憧憬——

富田 広 樹

北九州市立大学文学部  
比較文化学科  
2024

# カフカのスペイン

## ——ここではない、どこかへの憧憬——

富田 広樹

ドクトル・カフカは私を遮った。「この事務室ばかりではない、大体がそうなのです」——彼は右手を握って胸の上に置いた。「私はいつも内部に鉄格子を抱いているのです」

グスタフ・ヤノーホ『カフカとの対話』

### 要 旨

フランツ・カフカは、プラハを離れることを終生夢見ながら、最晩年に病氣療養のため故郷をあとにするまでそれを果たすことができなかった。ここではない、どこかへの憧憬を象徴する人物として、その日記や書簡においてたびたび言及され、作家の最初の就職にあたってもおおきな影響を及ぼしたマドリードの叔父アルフレート・レヴィイを手がかりに、カフカ自身が一度として足を踏み入れることのなかったスペインが彼に意味したものを検討する。

### キーワード

フランツ・カフカ、スペイン、鉄道、プラハ

### はじめに

スペイン・マドリードの南に位置するデリシアス駅のそばに鉄道博物館がある<sup>1</sup>。歴史的建造物はそれ自体、かつてマドリード・デリシアス駅として営業していたものだ。国の西部やポルトガル方面に向かう特急列車の始発駅であった。同駅設立一四〇周年を記念する展覧会が二〇二〇年に開催される運びとなっていたが、COVID-19の流行による影響から当初の予定を変更、インターネット上のヴァーチャル展覧会として公開された（後に有人での一般公開がおこなわれた）。その展示のなかに、チェコが産んだ二〇世紀を代表する作家フランツ・カフカの写真が含まれている<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 本稿執筆にあたっては、鉄道博物館（Museo del Ferrocarril de Madrid）ならびに同館発行の雑誌 *Via Libre* よりひとかたならぬ支援をいただいた。情報提供のみならず写真の複製にあたってもこころよく許諾いただいたことに心より感謝を申しあげる。

<sup>2</sup> 現在は博物館のホームページの特別ページにデジタルアルバムとして公開されている。

[https://www.museodelferrocarril.org/140Delicias/pdf/FichasDelicias/21\\_ALoewy\\_tio\\_de\\_Kafka.pdf](https://www.museodelferrocarril.org/140Delicias/pdf/FichasDelicias/21_ALoewy_tio_de_Kafka.pdf)



写真1 「マドリードの伯父」とフランツ・カフカ  
© *Vía Libre* de la Fundación de los Ferrocarriles Españoles (FFE)

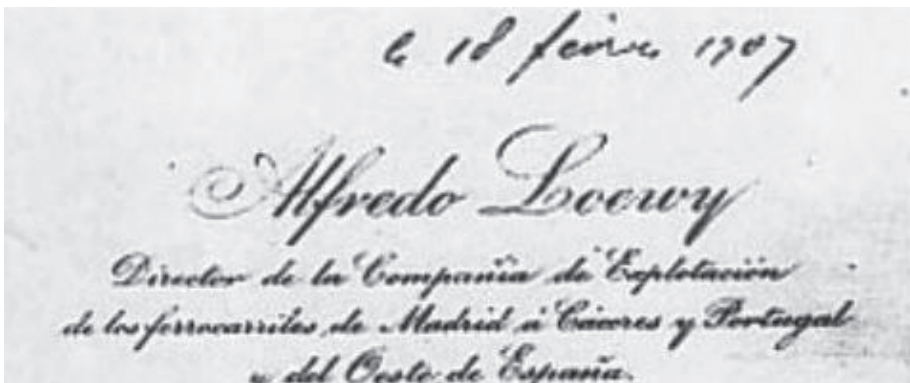


写真2 綴りがスペイン語化されたアルフレッド・ロエビの名刺  
© *Vía Libre* de la Fundación de los Ferrocarriles Españoles (FFE)

母方の伯父アルフレッド・ロエビとともに写るカフカは若干二四歳。白晳の青年は緊張した表情を浮かべている。その隣に立つアルフレッド伯父は立派な髭をたくわえており、微笑を湛えている。だが、なぜこの場所にカフカの写真があったのだろうか。

カフカの母方の伯父、本名アルフレート・レヴィ・ポリアスは若くしてスペインにやって来て、スペイン西部の鉄道敷設事業に携わり、一九〇八年から一九二三年の二月二八日に急死するまで、マドリードーカセレス、ポルトガル、スペイン西部間鉄道開発会社の総裁の地位にあった。オフィスを構えたデリシアス駅から離れたマヨール通りに居を構え、今ではカラバンチェル区のサンタ・マリア秘蹟霊園に埋葬されている。チェコを遠く離れたスペインの地に骨を埋めることとなったこのアルフレート伯父を導き手として、フランツ・カフカが一度として訪れることのなかったスペインが彼にとって意味したものを検討してみたい。プラハという都市に長年にわたって囚われることとなった作家が抱いた憧憬が見え隠れことになるだろう。

## マドリードの伯父

アルフレート・レヴィ・ポリアスは一八五二年一二月一八日、ポジェブラディに産まれた。現在のチェコ共和国中央ボヘミア地方に位置する小さな街だが、二〇世紀初頭からは街に湧出した温泉によっても知られている。一五世紀後半にボヘミア国王イジーがあらわれ、彼によって特権を付与された。

プラハで学んだ後ウィーン、そしてパリに出（一八九〇年にフランス国籍を取得している<sup>3</sup>）、そこでビュノ・ヴァリヤ兄弟の知遇を得た。兄フィリップはパナマ運河の建設や同国のコロンビアからの独立に暗躍した人物で、弟のモーリスはのちにフランスの日刊紙『ル・マタン』の社主となった。彼らの手引きによりアルフレートは一九世紀終わりにはスペインの首都にあって、スペイン西部の鉄道開発に尽力した。一九〇八年から亡くなる一九二三年までは総裁の地位にあった。同社は後に国有化され、現在のスペイン国鉄（RENFE）を構成する。

エッセイに健筆をふるったドイツ文学者、池内紀が「実のところはそれほどの地位でもなかったらしいが<sup>4</sup>」と書いているが、これはまったく正しくない。カフカの伯父は他の鉄道会社（メディナ・デル・カンポーサラマンカ間鉄道会社）や共済組合の重役も務めており、同時代にあってきわめて重要な経済人のひとりであった。一九〇五年にはスペインを公式訪問したフランス大統領エミール・ルーベからレジオン・ドヌール・シュヴァリエ勲章が授与され、またおなじ年に国際鉄道会議出席のためアメリカ・ワシントンを訪れた際には、他の出席者とともにアメリカ合衆国大統領

<sup>3</sup> アンソニー・ノーシー『カフカ家の人々 一族の生活とカフカの作品』石丸昭二訳、法政大学出版局、一九九二年、四八頁。

<sup>4</sup> 池内紀『カフカの生涯』新書館、二〇〇四年、三二頁。

セオドア・ルーズヴェルトより歓迎を受け、握手を交わしている<sup>5</sup>。死去の翌日には日刊紙 *ABC* に巨大な死亡広告が掲載されているほか、同年三月の建築と工学の専門誌にもお悔やみの記事が掲載されている<sup>6</sup>。柩は鉄道会社社員が肩に負って運び、社葬といえる規模で行なわれた葬儀には、駐スペイン・フランス大使ジュール・アルベール・ドフランスも参列した<sup>7</sup>。一九二三年三月一日午後四時のことである。

アルフレッド伯父はカフカの日記や友人、恋人に宛てた書簡にも時折顔を見せる。その最初のものはおそらく、オスカー・ボラックに宛てた手紙の一節だろう。一九〇二年八月二四日の到着印がある。

マドリードの伯父（鉄道支配人）がこちらへ来ていて、僕のほうも彼のためにプラハにいた。彼が着くすこしまえに僕は、彼に頼んでみよう、いや頼むのじゃないたずねてみようという奇妙な、残念ながら大そう奇妙なことを思いついたのだが、それは彼が僕をこうしたことどもから助け出してはくれまいか、ついに新規まきなおしのできるようなどこかへ連れて行ってはもらえまいか、というわけだ。彼は、ふたんはじつに愛すべき人物なのだけれども、さももったいらしく話しはじめて、いいよ、いいよ、と僕を慰めるのだ。それで万事おしまい。僕は、本当はそのつもりもないのにすぐ黙ってしまって、彼のためにプラハにいる二日間というもの、まるまる彼のそばにいたにもかかわらず、もう一言もその話はせずじまいだった<sup>8</sup>。（九巻、一〇頁）

直前まで家族トリポッホに滞在していたカフカが、頼み事をするためにプラハに舞い戻り、思うような成果を得られなかった様子がうかがえる。「こうしたことどもから助け出し」、「新規まきなおしのできるようなどこかへ連れて行ってはもらえまいか」というカフカの願いは潰えている。数ヶ月後にはおなじボラックに宛ててつぎのように書いている。

プラハは放さない。僕たちどちらをもだ。このお袋さんには、獐猛な爪がある。これでは意に従わざるをえない、さもなければ——。（九巻、一一頁）

<sup>5</sup> アンソニー・ノーシー『カフカ家の人々 一族の生活とカフカの作品』五五-五七頁。

<sup>6</sup> *Ingeniería, y construcción*. Vol. I, Núm. 3 (1923). pág. 142.

<sup>7</sup> Nieto Redruejo, Silvia. "Alfredo Loewy, el tío de Kafka que vivió en la calle Mayor de Madrid." *ABC*. 19 de diciembre de 2021. pág. 20.

<sup>8</sup> 本稿におけるカフカ作品、日記、書簡からの引用はすべてマックス・プロート編集『決定版 カフカ全集』新潮社、全一二巻、一九九二年による。同全集からの引用に際しては本文中で括弧内に巻数とページ数を示す。引用に際して表現をあらためた箇所がある。

若干一九歳のカフカが「新規まきなおし」を希求する事情は具体的には示されていない。しかし、その彼が助けを遠方に住むアルフレート伯父に求めたことは注目に値する。

幼年時代より自身の性格形成に絶大な影響を及ぼし、長じてなお自らを圧する「暴君」である父親に対する悪魔払いの様相を呈する長文の「父への手紙」においてフランツは、父方の血統（カフカー族）よりも母方のそれ（レヴィー族）への親和性を表明している。

父上とほくと、二人を比較してみてください。ほくは、ごく簡単に表現すれば、カフカー族の素地をもった、母方のレヴィの人間です。それも、カフカー族の生存欲、事業欲、征服欲によってではなく、レヴィ特有の鋭敏さによってうごめきはじめ、より秘かに、より内気に、別の方向にむかって活動し、しばしば全く休止してしまうようなたちの人間なのです。これに反して、あなたは生粋のカフカです。強さ、健康、食欲、声量、弁舌能力、自己満足、世間にたいする優越感、耐久力、沈着さ、人情の機微に通じていること、ある種の太っ腹など、みなその徴です。（三巻、一二五頁）

父を非難しながら、それを徹底することへの躊躇も垣間見える、ひじょうに繊細な一文だが、ここでフランツはカフカとレヴィの血統を対立するものと見なし、かつみずからレヴィの人間であるとしている。おなじことは、自身と同様に父親との軋轢に苦しんだ末妹オットラの擁護にあたって父娘のあいだの問題の核心を「最良のカフカの武器を備えた、一種のレヴィ的なもの」（三巻、一四五頁）と断じた際にも見受けられる。

フランツ・カフカの母ユリエには五人の兄弟（異母兄弟をふくむ）があった。そのなかのひとりジークフリート・レヴィもフランツと親しく交わり、短編「田舎医師」のモデルともなった。しかし、彼方スペインに暮らし鉄道会社総裁の地位にまで登り詰めたアルフレート伯父の存在は、フランツにとってきわめて大きいものであった。カフカ作品をチェコ語に翻訳したミレナ・イエセンスカに宛てた手紙のなかでもアルフレートを「とても好きな伯父」（八巻、六七頁）と呼んでいる。フランツはフェリーツェ・パウアーと二度婚約し、またその解消をしているが、彼女に宛てた膨大な量の手紙のなかにもたびたびアルフレートの名が挙がる。マドリードの伯父は甥の婚約を祝福し、フランツ、フェリーツェ両名に宛てて手紙を書き送った。鉄道会社の用箋に書かれたそれをフランツが自身の手紙に同封してフェリーツェに送ったものが保存されている（一一巻、五四八―四九頁）。

精神面のみならず、マドリードの伯父がフランツを実利面においても支えたことが知られている。先に引用したオスカー・ポラック宛ての書簡ではカフカは自身の望むところを引き出すことができなかつた様子だが、数年後法学博士としての学位を得たフランツが職を求める段になってアル

フレートの助力がおおいに役だち、彼はジェネラリ保険会社 (Assicurazioni Generali) にポストを得ることになる<sup>9</sup>。

だが、内気なはずのフランツが距離的にも離れており、また一見すれば愛憎入り交じる関係を持つことになった実父ヘルマンその人と同様に叩き上げの成功者であるアルフレート・レヴィをこれほどまでに頼り、支えとしたのはなぜか。

### ずっと遠い国々の肘掛け椅子

アルフレート伯父の助力によって最初の職場をジェネラリ保険会社に得る直前の一九〇七年八月中旬、フランツ・カフカは親友マックス・ブロートに宛てた手紙のなかで、つぎのように書いている。

いや、一〇月までに僕の見通しが少しもよくなる場合は、商業専門学校の高卒講座に出て、フランス語と英語のほかにスペイン語をやる。君が僕と一しょにやってくれれば、すてきなのだが。そうすれば、学習の上で僕がおくれているところは、焦りでもって埋め合せましょう。伯父に、僕たちのためにスペインでポストも作らせよう、あるいは南アメリカか、それともアゾレス諸島か、マデイラにでも行くことにするのだが。(九巻、三七頁)

楽天的に過ぎるとともに、虫のいい希望が書き連ねてあるのだが、ここでフランツがスペイン語を勉強する企図を示していることは看過できない。伯父の手引きがあればスペインに向けて出発する可能性もあると考えていた節がある。さらには、就職が決まって直後の一九〇七年一〇月、当時の恋人ヘートヴィヒ・ヴァイラーに宛ててこのように書いている。

僕はジェネラリ保険会社に勤めていて、ともかく自分もいつかずっと遠い国々の肘掛け椅子に坐って、事務室の窓から砂糖きびの畑だの、回教徒の墓地だのを見たいという希望を抱いている。(九巻、四九頁)

また、翌月には「僕はイタリア語を勉強している、最初はおそらくトリエステへ行くだろうから」(九巻、五一頁)と書いている。トリエステはジェネラリ保険会社の本拠である。

---

<sup>9</sup> カフカ関連書籍でこの会社を「一般保険会社」や「総合保険会社」としているものが数多いが、国際的に事業を展開するこの企業をあらわすのに適当ではない。元来はさまざまな種類の保険を扱う業態を指し示すものであったとはいえ、イタリア語使用地域以外での企業活動に際しても「ジェネラリ」という言葉を採用したのであるから、これは「ジェネラリ保険会社」とされるべきものだろう。General Motors (ゼネラルモーターズ) や General Electric (ゼネラル・エレクトリック) といった企業名と同様に扱われなければならない。なお、日本では「ゼネラリ保険会社」という名前でも事業をおこなっていたが、二〇一九年に日本支店が閉鎖された。



ここに明らかになるのは、カフカが海外への赴任を強く望んでいたということである。先に引いたオスカー・ポラック宛ての手紙において、カフカはプラハを離れることを望んで伯父に相談を持ちかけていたのだろうし、その望みが潰えるや「プラハは放さない」と書いていた。後年、フェリーツェとの婚約によってベルリンでの生活を思い描き、その年の日記にフランツは「プラハから離れること。ほくをこれまで傷つけてきたこの最も強烈な人間的損害に対して、ほくのなしうる最も強烈な反発手段で立ち向かうこと」（九巻、二六五頁）と記しているが、婚約解消によってその可能性をも自ら失うこととなった。

このように、フランツにとってはプラハを離れることが年来の希望であった。とすれば、若くしてボヘミアを後にし、異邦の地で立身出世を遂げたアルフレート伯父に羨望を抱き、またその力を頼むことで国外への脱出に一縷の望みを託したのは当然と言えよう。しかし、ジェネラルイ保険会社の職を辞してボヘミア王国プラハ労働者傷害保険協会にポストを得た時点で、またその職場にしがみつき仕事に汲々とする中で、「ずっと遠い国々の肘掛け椅子」という夢は真っ先に破られることとなった。

## カフカと鉄道

フェリーツェとの最初の婚約が解消された一九一四年、フランツ・カフカは日記に「カルダ鉄道の思い出」という短編を書いている（九巻、三〇三―三一二頁）。鉄道建設事業のためにロシア奥地に赴任する男が主人公となっている。カフカの日記は日々の出来事ばかりでなく、小説の下書きや短い作品それ自体も含まれる豊饒なテキストだが、その数日前にあたる八月一日には「パリにとどまっていて、伯父と腕を組み、彼にぴったり寄り添ってパリ中を歩くことを思い浮べる」（九巻、三〇三頁）と記述がある。この伯父がアルフレート・レヴィを指すと考えるのは自然だろう<sup>10</sup>（すでに述べたとおり、アルフレートは若くしてパリに出、フランス国籍を取得している）。「カルダ鉄道の思い出」もまた、フランツのおおくの作品と同様、未完のまま中断される。だが、フェリーツェとの婚約解消という痛手の後、アルフレート伯父を想起し、また彼をモデル（のひとり）にした主人公が出てくる作品が手がけられていることは興味深い。さらにいえば、ここで鉄道が出てくるのがきわめて重要なのである。

現存するカフカの日記は一九一〇年から始まっているが、最初の一文は「列車が通りすぎるたび

<sup>10</sup> カフカにはもうひとり、アフリカ大陸コンゴで鉄道建設に従事した叔父ヨーゼフ（アルフレート伯父や母ユーリエの末弟）がある。カフカの八つ折版ノート第一冊には「コンゴ河中流域で鉄道建設に従事していた当時、ほくがすごした生活はけっして愉快なものではなかった」と始まる断片が含まれている（三巻、四九頁）。カフカ研究者アンソニー・ノーシーは「カルダ鉄道の思い出」にアルフレート、ヨーゼフ両者の影響を認めている。『カフカ家の人々 一族の生活とカフカの作品』三〇、六四―七三頁。ただし、日記や書簡からうかがえるかぎりにおいては、アルフレート伯父との交流のほうがはるかに深いものであったといえよう。



に、見物人たちが立ちすくむ」(九巻、九頁)と始められている。市電も含め鉄道にかんする記述はおびただしく、駅や客車で場面も数多く記録されている。さらには夢のなかにさえ、鉄道やその駅がさかんに登場する。

それから見たもう一つの夢は、マックスやオットーやほくに、駅まで行ってからやっ自分たちの荷物をまとめる癖があるという夢だった。夢のなかでほくたちは、例えばシャツ類を中央ホールを通りぬけてずっと遠くの方にあるほくたちのトランクのところまで運んで行くのだった。こんなことはだれだってやることのように思われたが、ほくたちの間ではうまくいかなかった。なぜなら、とくにほくたちは汽車が入ってくる直前によく荷物をまとめ始めたからだ。そのときほくたちはもちろんいらいらして、よい席がとれないのは当然としても、まだ汽車に間に合うという期待もほとんど持っていなかった。(七巻、九三頁)

それどころか、カフカは汽車に乗るわけでもないのに、「ほとんど毎晩ほくは国鉄の駅へ行く」(七巻、二四六頁)と記している。フランツがそれほど鉄道に魅了されたのはどうしたわけか。

汽車のなかに坐っている。そのことを忘れてしまう。家にいるような気である。突然われに帰る。自分を猛スピードで運んでいく汽車の力を感じる。(七巻、三七一頁)

ブラハを脱出するために伯父の助力を頼んだことに見たとおり、カフカは自力で故郷を離れることができない。あまつさえ、逃げ出すという決断そのものから逃げ出してしまうことになる。息子とフェリーツェの二度の婚約のためにベルリンまで赴きながらそれが徒労に終わった父ヘルマンは「おまえの決断はよくよく当てにならぬ」(三巻、一六三頁)と苦言を呈したが、あながち的外れな非難ではなかった。フランツにしてみれば、出発地点とはかならず違う場所に「自分を猛スピードで運んでいく汽車の力」に身を委ねることは至福であったに違いない。

亡くなる前年にフランツは労働者傷害保険協会を病氣理由により早期退職するが、それ以前より療養を目的としてたびたび休暇を取得している。そうした折に医師の助言をよりどころとして休暇の延長を請願するその文面は、心なしか饒舌にして流麗な印象をあたえる。自分の意志に拠らず、決定の根拠が与えられていることへの安堵が見え隠れするようでもある。

カフカにとっての鉄道とは、こちらの考えを意に介することもせず、否応なしに影響をもたらす強大な力であり、さらには遠い場所へと自分を運び去ってくれるものであった。とすれば、マドリードの伯父が鉄道会社の総裁を務めているということもまた、彼に対する羨望や信頼を生み出す理由のひとつとなりえたであろう。

## ここではない、どこかへ

一九一三年、フェリーツェをベルリンに訪ねる直前の時期にカフカは彼女に宛ててつぎのように書いている。

知っておいて頂かなければなりません、ぼくが考えているのはもうほとんどこの二日間のことではなく、むしろ、途方もない奇跡が起らぬかぎりその後が続く、あなたに大変長いこと会えない、恐ろしい時間のことです。もっとも、あなたがぼくと一緒にイタリアへ行くか、せめてガルダ湖か、それともいっそスペインの伯父のところへ行くのなら別ですが。(一〇巻、三四一頁)

それともいっそスペインの伯父のところへ、と書きながらカフカにそのような心づもりはなかった。翌日の日記には「ぼくの内面生活の恐ろしいほどの不確実さ」(七巻、二一九頁)と書き綴っている。イタリアもガルダ湖も、そしてスペインもまた、絵空事に過ぎない。そのスペインは、カフカの作品『城』のなかに一度だけ登場する。恋仲になったフリーダとKのやりとりである。

「わたしは、ここのこんな生活には耐えられないわ。あなたがいつまでもわたしをおそばにおいでくださるお気持なら、わたしたちは、どこか南フランスかスペインへでも移住しなくちゃならないわ」

「ぼくは移住するわけにはいかない。この土地に定住するために、はるばるとやってきたんだ。ぼくは、ここにとどまるだろう」Kは、そう言って、この言葉とつじつまが合わないのだが、その矛盾を説明しようとはしないで、まるでひとりごとのように、こうつけくわえた。「定住しようという望み以外に、こんな荒れはてた土地におれを惹きつけるものは、いったい、なんだろう」(六巻、一五四頁)

ここにあらわれる南フランスもスペインも、地理的内実などともなわない空疎な記号であることは、Kが到着したのがただ「村」と呼ばれる空間であるのと変わらない。ここではない、どこかを指し示す便利な記号として利用されているにすぎないのである。

ここではない、どこかはカフカがフェリーツェとの生活を夢見たベルリンでも、スペインでも、シオニズム運動が高まりを見せる時代に合ってはパレスティナでもありえた。しかし、そのいずれでもなかった。ただ結核という病魔だけが彼をプラハの爪から解放し、ウィーン北方クロイスターノイブルクのサナトリウムに移らせた。一九二四年六月三日にカフカは息を引き取る。マドリードの伯父が亡くなって一年と三ヶ月あまり後のことだった。

## むすびにかえて

フランツ・カフカにとってマドリードの伯父アルフレート・レヴィは遠い異邦の地に暮らし、また鉄道にかかわる仕事で身を立てた人物として、特別な魅力を有していた。そして彼が住み、骨を埋めるに至ったスペインはここではない、どこかを手っ取り早く代理する土地の名となった。それは城のように遠く、またたどり着くことのできない場所。カフカにとってスペインという名が意味したのはそれ以上でもそれ以下でもない。カフカは伯父の伝手を便りにピレネー山脈の向こう側に足を踏み入れることは終生なかった。しかし、カフカの作品はスペイン語の翼に乗って大西洋を越えた。それについてはすでに一文草したので<sup>11</sup>、くりかえさない。

最後に、スペインとカフカの関係についてユニークな事柄をふたつ記しておきたい。ひとつは八折版ノートに残された『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』にかかわる記述である。カフカの遺稿のなかに小さな青色のノートが発見された。その第三冊にこれらが見つかる（三巻、五六頁、五八―五九頁）。カフカの蔵書にはセルバンテスのこの小説が含まれていたことが知られるが、これらの断片は従来の『ドン・キホーテ』解釈のいずれにもまったく似ていない。ヴァルター・ベンヤミンはカフカを論じるにあたってこれらを大いに重視した。

もうひとつも、セルバンテスの小説にかかわる。『ドン・キホーテ』前篇第一三章では、自ら命を絶った牧人クリソストモの挿話が語られる。自身を埋葬した後、原稿をすべて焼き捨ててほしいと言い遺す。しかし、遍歴の騎士に同行する紳士がそれを止めに入る。かくしてクリソストモの作品は『ドン・キホーテ』作中に息を吹きかえす（『ドン・キホーテ』は作中にべつの作品が数多く挿入される）。カフカは親友マックス・ブロートに遺言で自身の原稿を廃棄することを依頼した。だが、その際にカフカの脳裏をクリソストモの挿話がよぎらなかつたということがあるだろうか。先に言及したとおり他の誰にも似ていない『ドン・キホーテ』解釈を導き出しえたカフカが、その挿話を思い出さなかつたということがあるだろうか。まして、友人の作品を出版するために奔走したマックス・ブロートの性格を知悉していたカフカである。この遺言が遺稿の死後出版を託す行為遂行的なものになることを考えなかつたはずもない。すくなくとも、この遺言さえなければ「無事に」灰燼に帰すことのできる草稿はいくらでもあつたはずなのだ。

生前、グスタフ・ヤノーホとの会話でカフカは、自身の作品が世に出ることについてつぎのように語っている。

「そこなのです。マックス・ブロート、フェリクス・ヴェルチュ、そうした友人たちが皆、私の書いたものを何かと取り上げてしまう。そして、いつの間にか出版契約を結んでしまつては私を驚かすのです。私はその友人たちに不快を与えたくない。そこで、もともと全く私的な

<sup>11</sup> 富田広樹「カフカ、大西洋を跨ぐ フランツ・カフカのスペイン語世界における遍歴」『現代思想』二〇二四年一月臨時増刊号、一一五―一二頁。

手記や筆のすさびにすぎぬものが、結局出版されてしまいます。わたしの人間としての弱点の個人的な証拠書類が、印刷され、しかも売りに出るので。マックス・ブロートを筆頭に、友人たちがそれを文学に仕立て上げようと妄想しているためであり、私に、孤独の証言を破棄するだけの力がないためです」

しばらく間をおいて、彼は別な声で言った。「いま私が言ったことは、無論、単なる誇張であり、友人たちに対するささやかな悪意にすぎません。事實は、私自身これらの出版に協力している。私はすでにそれほどの恥知らずに墮落しています。自分の弱点の口実に、私は私の周囲の影響を実際以上に誇大視します。これは当然欺瞞です。私は他でもない法律家だ。私はだから、悪から手を切ることができないのです<sup>12</sup>」

先にふれた八折版ノートの断片でカフカは、「サンチョ・パンサについての真理」と題して、この従者こそがおびたしい数の騎士小説や怪盗小説を読み漁り、体内に巣くった悪魔をドン・キホーテと命名して閉めだしたと書いている。

一方、悪魔を閉めだしたサンチョ・パンサが、独立自由の男子となっていたことは言うまでもない。彼は、おそらく一種の責任感から、平然と、ドン・キホーテのかずかずの遠征につき従った。(三巻、五九頁)

どうしてもわからないのは、カフカ本人が自身をドン・キホーテと見ていたか、それともサンチョ・パンサを以て任じていたかである。

## 参考文献

### 欧文

Garcival, Gonzalo. "Kafka y su «tío de España», don Alfredo [sic] Loewy." *ABC*. 26 de enero de 1980. pág. 21.

Nieto Redrujo, Silvia. "Alfredo Loewy, el tío de Kafka que vivió en la calle Mayor de Madrid." *ABC*. 19 de diciembre de 2021. págs. 20-21.

Ramírez de Lucas, Juan. "Franz Kafka y su «tío de Madrid»." *ABC*. 1 de febrero de 1980. págs. 13 y 15.

Tijeras, Eduardo. "Franz Kafka y su «tío de España», dirigente de ferrocarriles." *Via Libre*. febrero 1979. págs. 38-40.

---. "Centenario de su nacimiento. Los trenes de Kafka." *Via Libre*. mayo 1983. pág. 37.

---

<sup>12</sup> ヤノーホ、グスタフ『カフカとの対話 手記と追想』吉田仙太郎訳、増補版、筑摩書房、一九六七年、三二頁。

## 邦文

池内紀『カフカの生涯』新書館、二〇〇四年。

ヴァーゲンバッハ、クラウス『若き日のカフカ』中野孝次、高辻知義訳、ちくま学芸文庫、一九九五年。

——『カフカのプラハ』須藤正美訳、水声社、二〇〇三年。

セルバンテス『ドン・キホーテ 前編 (一)』牛島信明訳、岩波文庫、二〇〇一年。

富田広樹「カフカ、大西洋を跨ぐ」フランツ・カフカのスペイン語世界における遍歴』『現代思想』二〇二四年一月臨時増刊号、一一五-三二頁。

ノーシー、アンソニー『カフカ家の人々 一族の生活とカフカ作品』石丸昭二訳、法政大学出版局、一九九二年。

平出隆「カフカと「西」のベルリン」『現代思想』二〇二四年一月臨時増刊号、二四-二八頁。

プロート、マックス編『決定版 カフカ全集』新潮社、全一二巻、一九九二年。

ベンヤミン、ヴァルター『ベンヤミン・コレクション (2) エッセイの思想』浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、一九九六年。

ヤノーホ、グスタフ『カフカとの対話 手記と追想』吉田仙太郎訳、増補版、筑摩書房、一九六七年。



写真3 アルフレート・レヴィの墓 (サンタ・マリア秘蹟霊園、マドリード)

© Archivo Histórico Ferroviario del Museo del Ferrocarril de Madrid (Fotografía: NURIA TORRES BALLESTEROS)